

ドイツにおけるエラスムス  
—学生の流動性を中心に考える—

ボン研究連絡センター

田尾 若菜

## 1. はじめに

筆者は平成 24 年 2 月から平成 26 年 3 月までの間、日本学術振興会人材育成事業部海外派遣事業課にて、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」<sup>1</sup>（以下組織派遣プログラムという）を担当した。平成 21 年度から始まったこのプログラムでは、国内の大学・研究機関等 39 機関、96 課題が採択され、事業期間であった約 3 年 3 か月の間に、114 か国に延べ 10,048 人の学部生、大学院生、ポスドク、助教、講師等の若手研究者を海外に派遣する結果となった<sup>2</sup>。

組織派遣プログラムが設置された主な理由としては、学生や若手研究者の日本から海外への派遣者数がピーク時の半数以下にまで減少しているという文部科学省（以下 MEXT という）の調査<sup>3</sup>等を受けて、若手研究者の海外派遣を組織的に後押しし、今後の学生や若手研究者の海外派遣支援に繋げるためのきっかけとするためであった。このプログラムの大きな特徴として挙げられるのは、学部生も支援対象であったこと<sup>4</sup>、組織的に海外派遣を行うことを目的とするため、テーマ設定によっては複数の研究科にまたがって学生や若手研究者を派遣することができたことである。

平成 21 年度補正予算によって時限付きで設置されたため、平成 24 年度をもって組織派遣プログラムは事業を終了したが、プログラムを担当する中で採択事業の担当教員や派遣された若手研究者等の意見を聞く機会があり、このプログラムをきっかけに、他の研究科と協力して海外派遣をする体制を作ることができた（教員意見）、短期間の海外派遣をきっかけに次の長期留学に向けての準備ができた（派遣者意見）、といった声を聞くことができた。

このような経験を通して、筆者は組織単位で学生や若手研究者を海外に派遣する支援体制に興味を持つようになった。国際協力員として派遣されたボン研究連絡センターの業務の中で、ドイツの高等教育や学術情報に触れ、ヨーロッパにおいてエラスムス計画という学生の留学や教員の海外留学・研修のための支援プログラムがあり、またそれが 25 年以上もの長い歴史を持つことを知り、エラスムスの内容や支援体制について調べてみようと思ったことが本報告書の動機である。本報告書ではエラスムス計画の全体像を把握するとともに、特にドイツにおけるエラスムス計画の状況や成果を、統計や担当者へのインタビューにより考察する。また、ひいては、エラスムス計画を参考にして、日本における学生や若手研究者への海外派遣支援に示唆を受ける点があるか考えてみたい。

---

<sup>1</sup> JSPS: <https://www.jsps.go.jp/j-daikokai/index.html>（2016 年 1 月 24 日アクセス）

<sup>2</sup> JSPS: <https://www.jsps.go.jp/j-daikokai/data/houkokusyo.pdf>（2016 年 1 月 24 日アクセス）

<sup>3</sup> MEXT: [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/kokusai/kouryu/\\_icsFiles/afieldfile/2013/02/07/1330745.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kokusai/kouryu/_icsFiles/afieldfile/2013/02/07/1330745.pdf)（2016 年 1 月 24 日アクセス）

<sup>4</sup> JSPS が実施する事業の対象者は大学院生（博士課程）以上のため、学部生、大学院生（修士課程）を対象に含むプログラムはほとんどない。

## 2. エラスムス (Erasmus) の変遷

### 2.1 エラスムス計画の開始

エラスムス計画が始まる 6 年前から欧州委員会 (The European Commission : EC) によって試験的に学生交流の支援があったが、エラスムス計画の原型となるプログラムの素案は 1986 年初頭に提案された。当初は欧州委員会メンバーの中でも様々な意見があり、特に自国の交流プログラムを持つ国はエラスムス計画に反対を示したが、最終的には多数のメンバーの合意を得て、1987 年 6 月に成立した。

エラスムス計画は、15 世紀に実在し、ヨーロッパ各国を渡り歩いた哲学者の Erasmus of Rotterdam に由来していると同時に、EuRopean Community Action Scheme for the Mobility of University Students の頭文字から名づけられた。

プログラム開始の 1987/1988 年の学術期間では、11 か国 3,244 名の学生が参加した。エラスムス計画は、1987-1995 年まで続けられ、主に学生の流動性をメインに遂行された。

なお、フレームとしての「エラスムス」は今後も続いていくものであり、その中でおよそ 7 年を 1 期間 (generation) として、そのサポート内容や名前を変えつつ、EU 内外の国際交流や学生等のモビリティに寄与することを目指している。

### 2.2 教育プログラムの一部としてのエラスムス

#### 2.2.1 ソクラテス、LLP

1996-2006 年のエラスムスは、EC による教育プログラムであるソクラテスプログラム (SOCRATES Programme) の一部となり、1996-2000 年を第一期、2001-2006 年を第二期として進められた。ソクラテスでは、学生の派遣だけでなく、教員の派遣や大学間の協力体制の強化も含んだ。

2007-2013 年の期間は、エラスムスは、EU 生涯学習計画 (Lifelong Learning Programme: LLP) の一部として運営された。LLP はヨーロッパのあらゆる年代・年齢層の人が海外で学ぶ機会を与えるためのプログラムであり、高等教育機関の学生や研究者のためのエラスムス、初中等教育機関のためのコメニウス、教育者や社会人のためのグルンドヴィ、ヨーロッパ融合のためのジャン・モネ、職業訓練生のためのレオナルド・ダ・ヴィンチのそれぞれのプログラムの総称である。

## 2.2.2 エラスムス・ムンドゥス

エラスムス・ムンドゥスは、EU 以外の国との協力を支援し、更なる学生や研究者の移動を促進することでヨーロッパ地域の高等教育における質や活動を強化することを目的として開始した。2004-2008 年を第一期、2009-2013 年を第二期として、主に複数の大学における修士・博士課程の共同プログラムの支援、EU 地域外の学生や研究者のための奨学金、EU 内外の高等教育機関におけるパートナーシップの構築を支援するものである。なお、このエラスムス・ムンドゥスの一部は、2014 年以降エラスムス・プラスの一部（Erasmus Mundus Joint Master Degrees : EMJMD）として引き続き継続している。

## 2.3 エラスムス・プラス

前述のエラスムスが組み込まれた EU 生涯学習計画（LLP）が 2013 年に終了したことを受けて、後継として 2014 年から始まったプログラムである。2020 年までの 7 年間に、約 148 億ユーロの予算を投入し、欧州の 400 万人以上の一般教育、職業教育、青少年及びスポーツ分野における学生、職業訓練生、教職員、ボランティア等が留学のための奨学金や助成金、所属機関や派遣機関におけるサポートを受けることになる<sup>5</sup>。現在、EU の 28 か国とトルコ、スイス、リヒテンシュタイン、ノルウェー、アイスランドを含む 33 か国が参加している。

これまでの構造と大きく異なることは、今までのエラスムスは、ソクラテスや LLP の一部として高等教育における学生や教職員の流動性を支援していたが、エラスムス・プラスからは、その他の初中等教育や職業訓練等における全世代、各種の支援も内包する構造となったことである。

エラスムス・プラスの構造としては、以下の 3 つのキーアクションを含む 5 つの項目によって構築されている<sup>6</sup>。ここでは、今回のテーマである学生の派遣支援を含むキーアクション 1 の高等教育における内容を中心に、前回のプログラムとの変更点や支援内容を説明する。

### 【キーアクション 1：個人の流動性】

この項目では、学生や教職員、職業訓練生等あらゆる立場の個人の海外留学・研修を支援する。また、エラスムス・ムンドゥスから引き続く修士課程のジョイントディグリー、修士課程の教育ローン<sup>7</sup>の支援も行う。

高等教育における具体的な支援内容は以下のとおりである。

- ・以前のエラスムスまでは、学生が利用できるのは 1 回のみだったが、エラスムス・プラスからは最大 12 か月、何度でも利用できるようになった。
- ・学部学生、修士学生、博士学生の時期にそれぞれ 12 か月利用でき、一人の学生が最大 36 か月利用できる。

<sup>5</sup> BMBF : <https://www.bmbf.de/de/perspektiven-fuer-europas-jugendliche-489.html> (2016 年 1 月 24 日アクセス)

<sup>6</sup> Erasmus Programme Guide :

[http://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/documents/erasmus-plus-programme-guide\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/documents/erasmus-plus-programme-guide_en.pdf) (2016 年 1 月 27 日アクセス)

・学生は卒業して1年以内であれば、利用しなかった月数の支援を受けることができる。例えば、学部学生時に3か月エラスムスで留学した後、卒業して1年以内に残りの9か月分を、卒業した大学に申請することができる。

・これまで留学と同様にインターンシップも最低3か月からしか利用できなかったが、エラスムス・プラスからは、インターンシップは最低2か月からの利用が可能となった。

・ドイツにおいては、大学ごとに奨学金の金額を柔軟に設定できるようになっている。エラスムスに参加する国を経済状況等によって3区分に分け、最低150ユーロから、最高500ユーロまで、50ユーロの差額を設けて決定する。例えば、最低170ユーロとすると、220ユーロ、270ユーロの奨学金となり、学生は渡航する国の区分によって受け取る金額が異なる。

#### 【キーアクション2：イノベーションと知識交換のための協力体制】

この項目で支援される内容は、異なる分野の組織間での知識交換やそれによるイノベーション促進のための戦略的な協力体制、組織の国際化及びヨーロッパにまたがるデータベースやオンライン学習等のIT支援事業に対する支援となっている。EU内での大学間での戦略的な協力体制の強化や、発展途上国を含むEU域外の国との協力体制への支援が含まれている。

#### 【キーアクション3：ポリシー再構築の支援】

この項目では、教育や職業訓練等に関する知識や、エビデンスに基づく分析等の組織的な協力体制、EU全域で実施している数々のプログラムに関する意見交換等に係る支援を行う。主にECや各国のエラスムスを担当するNational Agency<sup>7</sup>によって推進される政策レベルでの支援である。

#### 【ジャン・モネ】

これは、教員や研究者が短期間ヨーロッパの教育機関で教育者トレーニングを受けるためのプログラムへの支援となっている。

#### 【スポーツ】

スポーツ分野において、ヨーロッパ内の協力体制を強化するために、非営利なスポーツイベントへの支援、スポーツに関する共同でのデータ解析や会議開催等に対して支援するものとなっている。

なお、キーアクション1～3は、EUによる管理（Central management）と国ごとの管理（Decentral management）によって分担が分かれているが、ジャン・モネ及びスポーツに関してはEUによる管理のみとなっている。

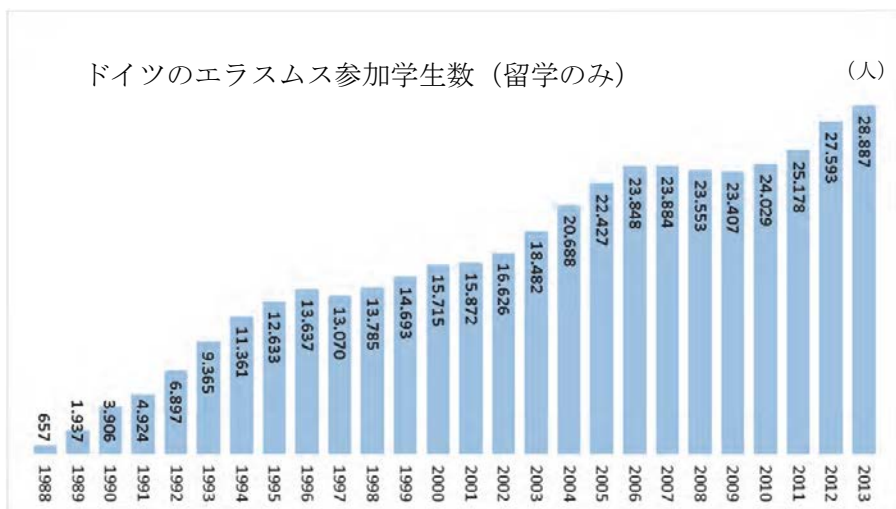
### 3. ドイツにおけるエラスムス

ここでは、具体的な統計資料を用いて、ドイツの学生の実績がどのようになっているかを考察

<sup>7</sup> エラスムス参加国の国内の参加機関を取りまとめる機関

する。

ドイツは、エラスムス計画が始まった 1987 年から参加しており、このプログラムによって多くの学生が海外留学している。開始当初の 1988 年には参加学生数は年間 657 人であったが、2013 年には年間 28,887 人まで達した（以下グラフ 1 参照 8）。また、2014 年時点でエラスムス・プラスに参加するドイツの大学等の数は 337 校に上り 9、150 か国のパートナー大学約 5,000 校との間に約 31,000 件の国際連携が成立されており、その半数以上がエラスムスを基にしているとの結果が出ている 10。



なお、以下の統計資料は 2008 年～2012 年の 5 年間、エラスムスにおけるドイツ国内の学生数の推移である 11。

#### 【年間目的別学生数の推移】

以下グラフ 2 は、5 年間の学生数を目的別に合計したものである。目的は留学（単位取得、語学研修等を含む）及びインターンシップの 2 種類である。ここから分かることは、年々エラスムスで海外渡航する学生数は多くなっていること、インターンシップを目的とする学生も常に一定の割合がいることである。

8 HRK : [http://www.hrk.de/uploads/media/dok\\_und\\_mat\\_band\\_78.pdf](http://www.hrk.de/uploads/media/dok_und_mat_band_78.pdf) より加工（2016 年 1 月 31 日アクセス）

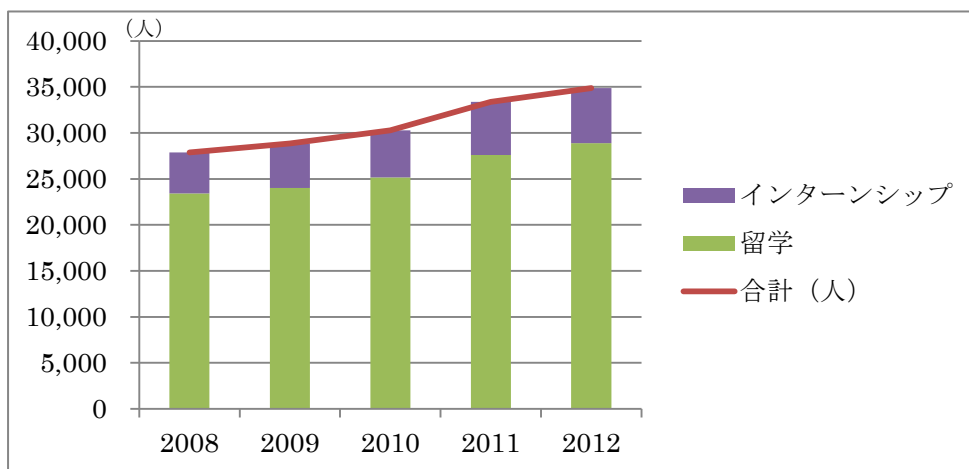
9 DAAD : [https://eu.daad.de/medien/eu/erasmus/erasmusstatistik/1314\\_era\\_statistik\\_hs\\_bew\\_ges.pdf](https://eu.daad.de/medien/eu/erasmus/erasmusstatistik/1314_era_statistik_hs_bew_ges.pdf)（2016 年 2 月 5 日アクセス）

10 DAAD :

<https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/32729-deutsche-hochschulen-schaerfen-ihr-internationales-profil/>（2016 年 2 月 9 日アクセス）

11 Statistics for all : <http://www.statisticsforall.eu/maps-erasmus-students.php#> より作成（グラフ 2～4）（2016 年 1 月 30 日アクセス）

(グラフ 2)



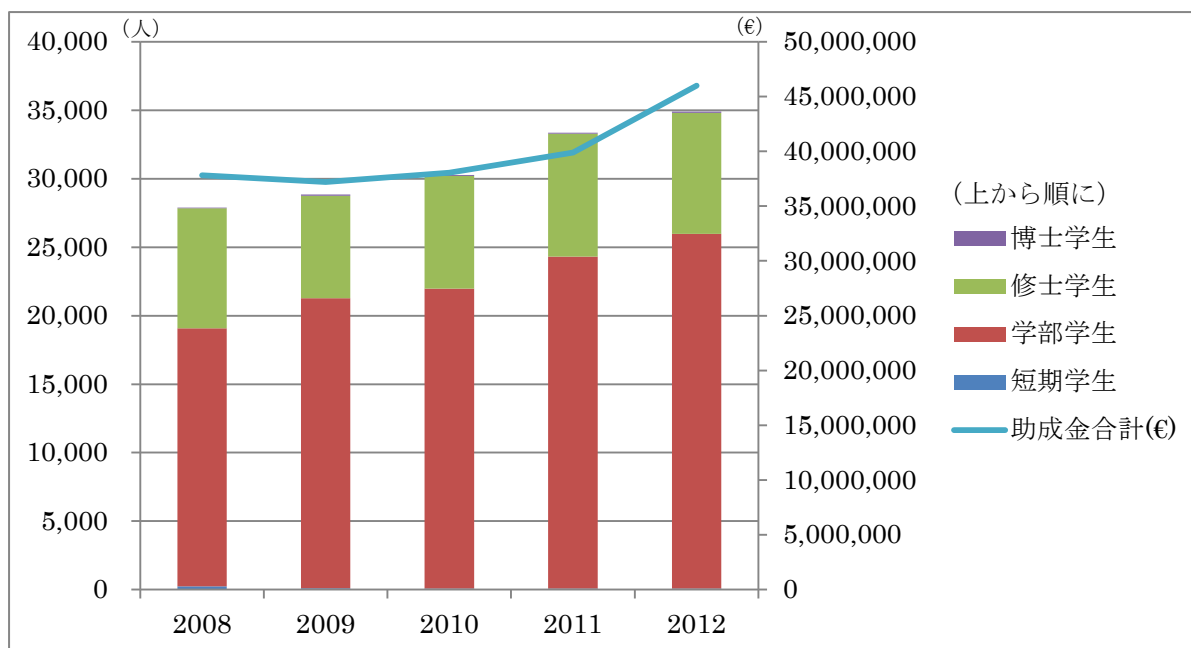
### 【学生の内訳と助成金額の推移】

グラフ 3 では、学生の内訳と合計数及び助成金合計を示している。

エラスムスを利用するのは、主に学部学生、修士学生が中心となっている。これは、エラスムスが教育のための奨学金であり、単位取得を目的としていることが大きく関与していると考えられる。ここでは、大多数である学部学生及び修士学生別の渡航理由の詳細なデータは入手できなかったが、就職を見据える修士学生の方が、インターンシップを目的とした渡航も多数を占めるのではないかと推測される。

また、助成金額については、2008 年から 2009 年にかけて微減となっているが、2010 年からは前年比金額よりも増加しており、特に 2011 年から 2012 年の増加率が大きい。

(グラフ 3)



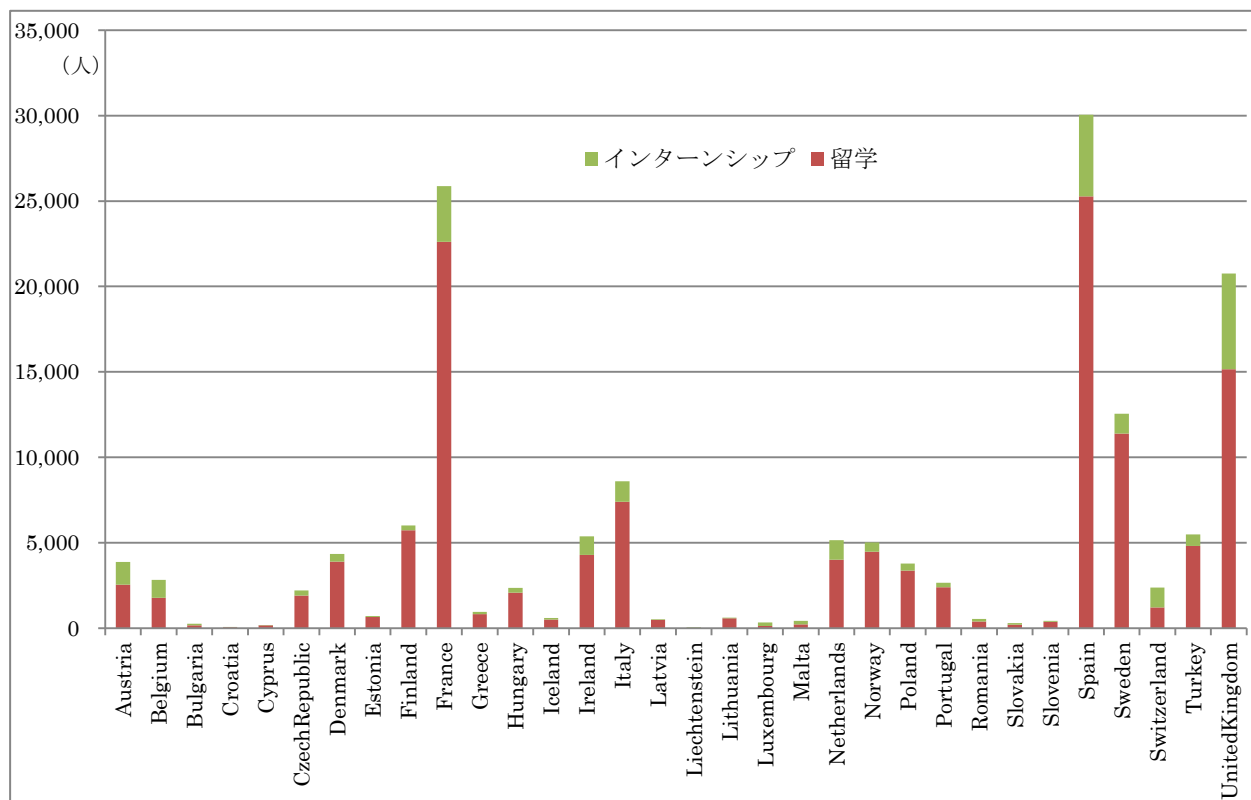
短期学生 (Short Cycle) : ドイツの大学入学資格 Abitur を持たない学生が、2 年未満で学ぶ制度。

### 【渡航先と目的別人数】

以下のグラフ 4 では、5 年間の学生の渡航先と目的別に合計数を示している。

このグラフから、ドイツの学生の渡航先の上位はスペイン、フランス、イギリスであること、イギリスの渡航目的が、他の国に比べインターンシップが多いことが挙げられる。

(グラフ 4)



### 【専攻別にみる渡航先】

グラフ 5<sup>12</sup>は、主要な渡航先 9 개국において、学部別の学生数の割合を示している<sup>13</sup>。これによると、フランスへ留学する半数以上が文科系科目である語学や法律、社会科学であるのに対し、ハンガリーへの留学目的の半数以上が医学分野となっている。一番下段のドイツ全体の学生の専攻別割合と比較して、ほぼ同等の割合となっているのは、スウェーデンである。文系専攻の渡航先として多いのは、フランス、スペイン、イギリス、オーストリア、スイス、オランダである。理系専攻の渡航先として多いのは、スウェーデン、ハンガリーとなっている。

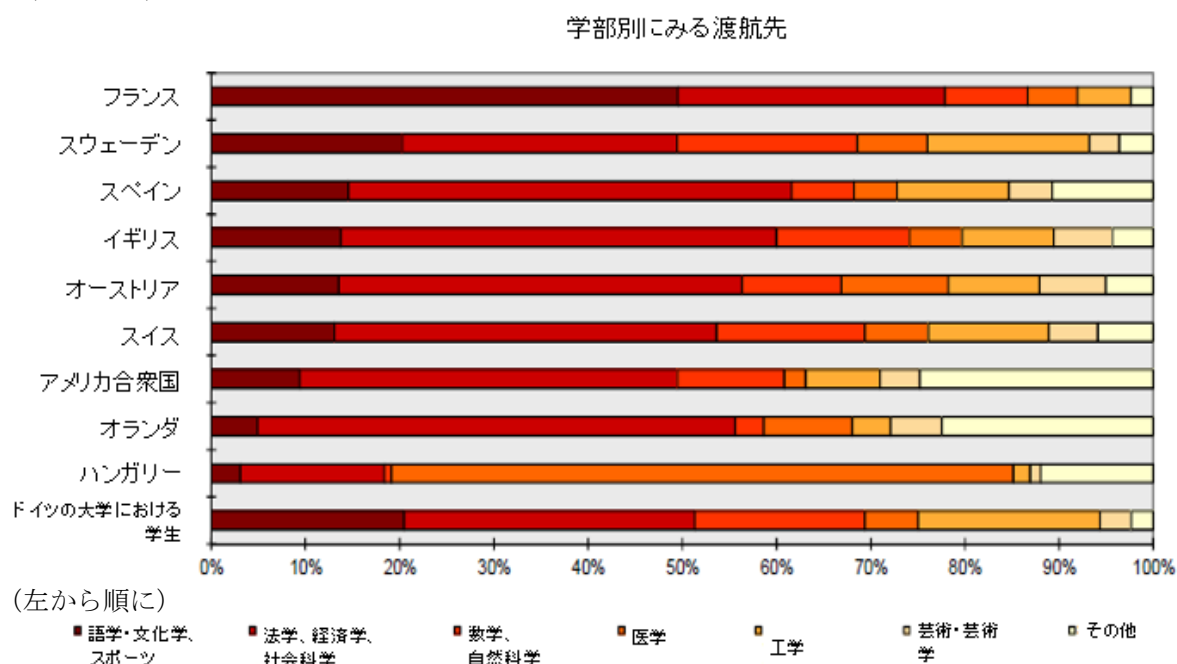
<sup>12</sup> DSTATIS Statistisches Bundesamt :

<https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/BildungForschungKultur/Hochschulen/StudierendeAusland5217101147004.pdf?blob=publicationFile> より加工 (2016 年 1 月 31 日アクセス)

<sup>13</sup> このグラフにはエラスムス以外の奨学金等で留学した学生数も含まれる。



(グラフ 5)



なお、2014年にドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austausch Dienst: DAAD）によって発表された“Student and Staff Mobility in Times of Crisis”<sup>14</sup>によると、2008/2009年の学術期間におけるドイツのエラスムスに参加する学生数は、他の国の平均よりも低かった。

2012/2013年とそれ以前を比べ、学生の流動性の傾向にも変化がみられ、インターンシップのために海外へ行く学生数の増加比率は、他の国に比べ低い。この傾向は、ドイツの経済状況がよくなり、ドイツの学生にとって海外でインターンシップをするよりも、自国で経験した方がよいと考えられているからだと指摘している。

#### 4. ドイツの大学におけるエラスムス実施状況－担当者インタビュー報告

ボン研究連絡センターの近隣大学及びイベント開催等で訪れた国際課の担当者にインタビューもしくはアンケートを依頼し、各大学でのエラスムスの実施状況を調査した。結果は以下のとおりである。

##### 4.1 ボン大学

<sup>14</sup> DAAD : <http://www.european-net.org/2015/09/daad-study-erasmus-mobility-in-times-of-crisis/> (2016年1月31日アクセス)

### 4.1.1 概要<sup>15</sup>

正式名称：Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn

設立年：1818年

学部数：7学部

学生数：32,500名（うち留学生数約4,000名）（2014年9月時点）

教授数：544名（2014年9月時点）

アカデミックスタッフ数：3,935名（2014年9月時点）

エラスムスへの参加：1987年

### 4.1.2 インタビュー内容

訪問日：2016年1月25日

対応者：Ms. Susannne Maraizu, Head of Unit, ERASMUS Institutional Co-ordinator

#### ① 2014年の派遣者数について

エラスムスを含む他の奨学金も併せると大学全体としては約700人が海外留学している。学生自らが獲得した奨学金によって留学した場合の数までは把握していないので、それを加えると全体で900人くらいになるだろう。このうちエラスムスで派遣される学生は510人であり、その中の60人程度はインターンシップのために留学している。

#### ② 派遣者の海外留学の目的について

メインの目的となるのは、語学研修と単位取得である。その次に多いのがインターンシップである。エラスムスは教育プログラムであるので研究のために利用する人はほとんどいないが、博士課程学生が少数利用することもある。

#### ③ 派遣先の国の傾向

2014年の内訳は、フランス（99人）、スペイン（56人）、イタリア（50人）、イギリス（45人）、アイルランド（29人）、チェコ（21人）、ポーランド（18人）、オーストリア／スウェーデン（14人）、デンマーク／ノルウェー／トルコ（12人）が上位10か国となっている。フランスやイタリアの大学とは、共同のプログラムを持っているため、それによって派遣者数も多くなっている。

#### ④ 派遣期間はどのくらいか。

ほとんどの学生は、単位取得等のため、1セメスターの3か月～6か月で滞在している。目的がインターンシップであれば、2か月～3か月の短期間の利用も可能である。エラスムスを利用する学生は、12か月分の奨学金を受け取ることができるが、最大限に利用する人はあまりいない

<sup>15</sup> ボン大学：<https://www.uni-bonn.de/die-universitaet/publikationen>（2016年1月17日アクセス）

のが現状である。

⑤ 派遣する学生の選考はどのように行われるのか。

エラスムスを利用したい学生は、まず専攻の担当に申請書を提出し、そこでコーディネーターによって選考される。その結果を ERASMUS Institutional Co-ordinator で取りまとめる。学生の情報や行きたい国の情報をまとめ、全体としてどのくらいの予算が必要になるかを把握する。インターンシップ目的であれば、規程の奨学金より 100 ユーロ多く助成される。

⑥ 学生への支援内容はどのようなものか。

奨学金であるので、使途は決まっていない。エラスムス参加国の地域を 3 区分（150 ユーロ、200 ユーロ、250 ユーロ）に分けて決められた金額で、それを学生は何に使ってもよい。

⑦ 以前のエラスムスに比べて、エラスムス・プラスはどのようなプログラムとなっているか。

学生にとっては、最大 12 か月まで、異なる期間、例えば 3 か月イギリスに行って、3 か月スペインに行くという使い方もできるようになり、とても使いやすくなった。また、インターンシップのためだと 2 か月から利用できるようになったことは、3 か月だとインターンシップには長いので、そういう改善点はよいところである。投入される予算も増え、組織にとっても役立つ助成金となっている。

一方で、事務的にはますます集中的で管理的なシステムとなり、複雑で煩雑な手続きが増えた。留学前に他の国の言語を学ぶためのオンラインでの語学コースも設けられているが、学生はほとんど利用していない。

⑧ エラスムスは大学や学生にとってどのようなものとなっているか。

エラスムスによって、学生は海外に行くことが簡単になった。多くのヨーロッパの大学が参加しているため、大学からのサポートも受けやすくなり、とても重要なプログラムである。

他方で、大学としては、規模の大きな大学にとっては大変有益なプログラムであるが、規模の小さい単科大学や研究者には恩恵が少ない。エラスムスは教育プログラムであるため、国際的な共同研究等には利用できない。また、EU 以外の国との共同プログラムを立ち上げるにも、スタッフ不足によってなかなか進まないという現状もある。

⑨ エラスムス以外の留学のためのプログラムを大学独自で持っているか。

（大学独自ではないが）エラスムス以外には DAAD による PROMOS という助成金によって、年間 50～60 人の学生が留学やインターンシップに短期間派遣されている。

### 4.1.3 考察

全学生数に対するエラスムスへの参加者は 1.6%であり、大学が管理する奨学金によって派遣される学生のうち、エラスムスが占める割合は 72.9%となっている<sup>16</sup>。

目的では、インターンシップが 11.8%となっており、ドイツ全体 (3 に示したグラフ 2) の 2012 年の割合 17.2%に比べると少ない傾向である<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> 私費等で海外渡航する学生数を含まない。以下他の大学についても同様。

<sup>17</sup> 2012 年留学 28,887 人、インターンシップ 6,004 人

派遣先の特徴として、3に示したグラフ4のトップ10には入っていないチェコ、ポーランドが6位、7位となっている。また、グラフ4では第4位であるスウェーデンが、ボン大学では第8位となっている。

## 4.2 ケルン大学

### 4.2.1 概要

正式名称：Universität zu Köln

設立年：1388年（ただし1798年に一度閉鎖し、1919年に再開した。）

学部数：6学部

学生数：46,675名（2015夏学期時点）（うち留学生数4,576名）<sup>18</sup>

教授数：576名（2013年）<sup>19</sup>

研究者数：5,696名（2013年）

エラスムスへの参加：1987年

### 4.2.2 インタビュー内容

訪問日：2016年1月11日

対応者：Ms. Christiane Biehl, Head of Department “International Mobility”

#### ① 2014年の派遣者数について

エラスムスはかなり大きなプログラムであり、はっきりとした数字は把握していないが、ケルン大学全体として2014年に約1,400人の学生が海外留学しており、そのうち約700人がエラスムス・プラスで派遣されている。

#### ② 派遣者の海外留学の目的について

約75%の学生が、単位取得を目的としており、インターンシップが約10%、研究目的が約10%、語学研修は約5%となっている。大半の学生の目的が単位取得というのは、それがエラスムスの基本的な理念であり、エラスムスに参加する学生は海外の大学で単位取得することが求められているからである<sup>20</sup>。

#### ③ 派遣先の国の傾向

2014年の実績としては、フランス（146名）、スペイン（131名）、イギリス（79名）、トルコ

---

<sup>18</sup> ケルン大学：

[http://verwaltung.uni-koeln.de/stabsstelle01/content/statistik/kurzstatistik/e126728/I.Kurzstatistik\\_SS15.pdf](http://verwaltung.uni-koeln.de/stabsstelle01/content/statistik/kurzstatistik/e126728/I.Kurzstatistik_SS15.pdf)（博士課程学生を含まない）（2016年1月17日アクセス）

<sup>19</sup> ケルン大学：<http://www.portal.uni-koeln.de/8845.html?&L=1>（2016年1月17日アクセス）

<sup>20</sup> 1999年のボローニャ宣言によってEU内での大学カリキュラムが大きく変わり、相互の単位認定も容易になった。

(66名)、イタリア(42名)、ポルトガル(42名)、スウェーデン(35名)、ハンガリー(27名)と続く<sup>21</sup>。トップ5の派遣先は順位が入れ替わることもあるが、ほとんど毎年同じである。

④ 派遣期間はどのくらいか。

1か月～3か月(10%)、3か月～6か月(60%)、6か月～12か月(30%)となっている。基本的には単位取得が主な目的であるため、1セメスター分の6か月単位が多いのではないかと考えられる。

⑤ 派遣する学生の選考はどのように行われるのか。

エラスムスに応募したい学生はまず専攻の学部申請書を提出する。その学部によって選考が行われ、国際課としてはその結果を基に大学全体に必要な経費の計算等を行う。

⑥ 学生への支援内容はどのようなものか。

生活費のみ<sup>22</sup>。エラスムスに参加している国を3つの区分に分類し、150ユーロ、200ユーロ、250ユーロ/月の支援となる。したがって、生活費の高い国への希望者が多ければ、支援できる学生の数は少なくなる。また、学費に関しても学生が派遣先の海外の大学へ支払う必要はない。

⑦ 以前のエラスムスに比べて、エラスムス・プラスはどのようなプログラムとなっているか。

エラスムスを使う学生にとっては、より開かれたプログラムになったと思っている。例えば、一人の学生が最大12か月までの支援を受けることができ、3か月スペインに行った後、4か月フランスに行く、というような使い方もできるため、大変使い易くなった。一方で、担当者としては、事務手続きが煩雑になり、多くの書類を出さなくてはならず、毎年財務状況の報告書を提出しなくてはならない。また、エラスムスの支援内容等はECによって細かく決められており、大学の裁量はあまりない。例えば生活費の区分も、ECによって決められており、(選択の余地はあるものの)大学独自で決定できるわけではない。

⑧ エラスムスは大学や学生にとってどのようなものとなっているか。

よく知られたプログラムであり、ヨーロッパネットワークにとって協力体制を築く上で大変重要で必要不可欠なものとなっている。学生にとっても、国際的なネットワークを築くためのよい機会となっているだけでなく、生活費や学費の心配なく、留学先の単位が卒業単位として認められるため、休学することなく安心して留学できるということが大変魅力的である。

⑨ エラスムス以外の留学のためのプログラムを大学独自で持っているか。

(大学独自ではないが)DAADの奨学金プログラム等他にもいくつかある。ヨーロッパ各国に留学したい学生にはエラスムスがあり、ヨーロッパ以外のアメリカ地域やアジア地域に留学したい学生にはDAAD等のプログラムで支援している。

### 4.2.3 考察

全学生数に対するエラスムスへの参加者は約3%<sup>23</sup>であり、大学が管理する奨学金によって派

<sup>21</sup> この数字にはエラスムスだけでなく、他の奨学金等も含む留学生全体の数値となっている。

<sup>22</sup> 教員は支援内容が異なり、旅費も支援対象となっている。

<sup>23</sup> 学生数は2015年、派遣者数は2014年の数字である。

遣される学生のうち、エラスムスが占める割合は約 50%となっている。

目的では、インターンシップが約 10%ということであったので、2012 年の割合（グラフ 2）17.2%に比べると少ない傾向である。

今回のインタビューでは、国別派遣者数に他のプログラム等で派遣された学生数も含まれるため、派遣先の特徴を一概に比較することは難しいが、3 に示したグラフ 4 のトップ 10 ではないポルトガル、ハンガリーが含まれる。

## 4.3 デュッセルドルフ大学

### 4.3.1 概要<sup>24</sup>

正式名称：Heinrich Heine Universität Düsseldorf

設立年：1965 年

学部数：5 学部

学生数：27,649 名（2013 冬学期時点）（うち留学生数 3,265 名）

教授数：314 名（2013 年 12 月時点）

職員数：4,246 名（2013 年 12 月時点）

エラスムスへの参加：1987 年

### 4.3.2 インタビュー内容

調査日：2016 年 2 月 1 日（アンケートによる回答）

対応者：Dr. Anne Gellert, Director International Office

#### ① 2014 年の派遣者数について

全体として 396 人が海外渡航をしており、そのうち 288 人がエラスムスによって渡航している。

#### ② 派遣者の海外留学の目的について

全体としては、304 人が留学、92 人はインターンシップのためであり、エラスムスだけで見れば単位取得が 255 人、インターンシップが 33 人となっている。語学研修のためだけにエラスムスを利用する人はいない。

#### ③ 派遣先の国の傾向

フランス（55 人）、イタリア（41 人）、スペイン（41 人）、イギリス（36 人）、ベルギー（13 人）、トルコ（13 人）、ポーランド（12 人）、ノルウェー（11 人）、スウェーデン（11 人）、オー

---

<sup>24</sup> デュッセルドルフ大学：<http://www.uni-duesseldorf.de/home/en/about-hhu.html> 及び  
[http://www.uni-duesseldorf.de/home/fileadmin/redaktion/ZUV/Dezernat\\_5/Statistiken/Zahlenspiegel\\_Flyer/150119\\_Flyer\\_englisch\\_ueberarbeitet\\_ohne.pdf](http://www.uni-duesseldorf.de/home/fileadmin/redaktion/ZUV/Dezernat_5/Statistiken/Zahlenspiegel_Flyer/150119_Flyer_englisch_ueberarbeitet_ohne.pdf)（2016 年 2 月 1 日アクセス）

ストリア（8人）となっている。これらの数字にはインターンシップ目的の学生数も含まれる。

④ 派遣期間はどのくらいか。

1 か月～3 か月（23人）、3 か月～6 か月（222人）、6 か月～12 か月（43人）となっている。これらの数字にはインターンシップ目的の学生数も含まれる。

⑤ 派遣する学生の選考はどのように行われるのか。

応募する学生はまず、申請書を学部提出する。申請書や学術的な功績や語学力、動機といった審査条件は、各部局によって異なっている。審査に通った学生について、部局はパートナーとなる海外機関への登録と、International Office への登録を行うことになっている。

⑥ 学生への支援内容はどのようなものか。

生活費の一部となる奨学金

⑦ 以前の Erasmus に比べて、Erasmus+ はどのようなプログラムとなっているか。

良い点は、学生により多くの海外渡航の機会が増えたこと、インターンシップの支援期間が 60 日から可能となったこと、パートナー国との交流が可能となったこと。

改善点は、全てのキアクションにおいてより高い管理力が求められること。

⑧ Erasmus は大学や学生にとってどのようなものとなっているか。

海外渡航へのよい動機づけとなっており、学生のうちにそのような経験ができることは大変良い。

⑨ Erasmus 以外の留学のためのプログラムを大学独自で持っているか。

（大学独自ではないが）DAAD による PROMOS、EU ファンディングによる助成金等がある。

### 4.3.3 考察

全学生数に対する Erasmus への参加者は 1.4%<sup>25</sup>であり、大学が管理する奨学金によって派遣される学生のうち、Erasmus が占める割合は 72.7%となっている。

目的では、インターンシップが 11.5%であり、2012 年の割合（グラフ 2）17.2%に比べると少ない傾向である。

派遣先の特徴として、3 に示したグラフ 4 のトップ 10 には入っていないベルギー、ポーランドが 5 位、7 位となっている。また、グラフ 4 では第 4 位であるスウェーデンが、第 9 位となっている。

## 4.4 キール大学

### 4.4.1 概要<sup>26</sup>

<sup>25</sup> 学生数は 2013 年、派遣者数は 2014 年の数字である。

<sup>26</sup> キール大学：<http://www.uni-kiel.de/ueberblick/uni-portrait-e.shtml>（2016 年 2 月 5 日アクセス）

正式名称：Christian-Albrechts-Universität zu Kiel

設立年：1665年

学部数：8学部

学生数：約24,000名

研究者数：2,000名

エラスムスへの参加：1994/1995年

#### 4.4.2 インタビュー内容

調査日：2016年2月1日（アンケートによる回答）

対応者：Dr. Elisabeth Grunwald, ERASMUS-Coordinator

##### ① 2014年の派遣者数について

全体として約500人が海外渡航をしており、そのうち340人がエラスムスによって渡航している。

##### ② 派遣者の海外留学の目的について

単位取得が340人、インターンシップが57人、研究が20人、語学研修は350人となっている（複数回答）。

##### ③ 派遣先の国の傾向

スペイン（66人）、フランス（48人）、イギリス（34人）、ノルウェー（29人）、スウェーデン（21人）、デンマーク（18人）、ポルトガル／イタリア（15人）、トルコ（14人）、オランダ（12人）、フィンランド（11人）である。

##### ④ 派遣期間はどのくらいか。

1か月～3か月（10%）、3か月～6か月（70%）、6か月～12か月（20%）となっている。

##### ⑤ 派遣する学生の選考はどのように行われるのか。

応募する学生はまず、申請書を学部に提出し、学部ごとに審査が行われる。その後、各学部がその結果をERASMUS-Coordinatorに連絡する。

##### ⑥ 学生への支援内容はどのようなものか。

地域毎に月額で決められた奨学金であり、キール大学では200ユーロ、250ユーロ、300ユーロ／月と定めている。インターンシップが目的の場合は、留学よりも100ユーロ多い金額が定められている。

##### ⑦ 以前のエラスムスに比べて、エラスムス・プラスはどのようなプログラムとなっているか。

以前のプログラムに比べると、学生にとってより柔軟になった。例えば、何度も海外に行けるようになり、奨学金の金額も増えた。また、ヨーロッパの統一にも役立っている。その他、EU以外のパートナー国にも申請できるようになった。さらに、学生や教職員だけでなく、研究者にも海外に行く機会ができた。

##### ⑧ エラスムスは大学や学生にとってどのようなものとなっているか。



キール大学の国際化に重要なツールとなっている。また、学生にもよく知られている。

⑨ エラスムス以外の留学のためのプログラムを大学独自で持っているか。

DAAD の PROMOS やキール大学独自の交流プログラムがある。

### 4.4.3 考察

全学生数に対するエラスムスへの参加者は約 2%であり、大学が管理する奨学金によって派遣される学生のうち、エラスムスが占める割合は 68%となっている。

目的では、インターンシップが 16.8%であり、2012 年の割合（グラフ 2）17.2%とほぼ同じくらいとなっている。

派遣先の特徴として、3 に示したグラフ 4 のトップ 10 のうち 9 か国が入っており、平均的な結果と言える。また、それ以外にもデンマークやポルトガルが含まれている。デンマークは、地理的に行きやすい場所であることも理由として考えられる。

## 4.5 ドイツ学術交流会（DAAD）

ドイツ学術交流会（DAAD）は、学生や大学間の国際交流を促進させるため、様々な奨学金やプログラムによって助成金を配分するドイツのファンディングエージェンシーの一機関であるが、そのうちエラスムスのドイツの高等教育における National Agency としての役割も担っている。エラスムスの全体的な体制や DAAD の役割等をうかがうため、担当者の Dr. Markus Symmank にインタビューを行った。その内容は以下のとおりである。

### 4.5.1 インタビュー内容

① National Agency としての DAAD の役割とは何か。

ドイツ国内の高等教育機関に対してプログラムの、情報を伝えること、アドバイスする、マネジメントすることが主な役割である。ドイツでは、同様の National Agency が他に 3 機関あり、DAAD は高等教育機関に対しての責任を持っている。他の国では、1 つか 2 つの National Agency が取りまとめている国がほとんどであるが、ドイツは伝統的に 4 機関が National Agency としての役割を担っている。

② 2020 年までに 50%の卒業生が海外経験をもっている目標は、達成できると思うか。

EU 全体としては 20%であるが、ドイツは 50%と高い目標を設定している<sup>27</sup>。個人的な意見だと 30~35%は可能だと考えるが、助成金も横ばいである現状ではなかなか難しいのではないかと

<sup>27</sup> BMBF : <https://www.bmbf.de/de/ja-zu-studienaufenthalten-im-ausland-2078.html> (2016 年 1 月 31 日アクセス)

と考えている。

- ③ 大学でのインタビューで、プログラムの手続きの煩雑さや業務量の多さが指摘されているが、その点についての対策等はあるか。

確かに、学生の派遣数が増加するのに伴う業務量に対してのスタッフの増員のために利用できる助成金とはなっていないが、DAAD としては成功している具体例を紹介したりすることで参考にしてもらいたいと考えている。また、エラスムス・プラスという新しいプログラムになったのだから、大学も以前と同じやり方ではなく、新しく効果的なやり方にシフトしていく努力をしなければならないだろう。

- ④ ドイツの大学にとって、エラスムスはどのようなものとなっているか。

我々が運営するプログラムの中で、約 7 割の学生や教職員がエラスムスによって移動しており、流動性をもたらす最も規模の大きい、重要なプログラムだと言える。また、学生が海外経験することで、単位取得以上に語学能力であったり、文化的背景の異なる経験であったり、困難に立ち向かう姿勢であったりといった目に見えない部分の成長をもたらしていると言える。

一方でエラスムスは単位取得の支援という教育プログラムであり、その他の流動性に寄与できないという制限もあるため、DAAD ではそれを補完するようなプログラムで他の流動性を促している。

- ⑤ 33 か国でエラスムスを長く続けていく秘訣は何か。

以前は海外に行くことで「ヨーロッパ市民である」とはどういう事かを理解するために、流動性を高めようとしていたが、近年では労働市場で海外経験があることが有利に働くためという理由も多いと考える。2014 年に公表された“The ERASMUS Impact Study”<sup>28</sup>が示すように、エラスムスに参加した学生が、労働市場において優位性を発揮していることから言える。

- ⑥ エラスムス・プラスの後継事業はすでに協議されているのか。

今はまだ意見を出し合っている段階であるが、遅くとも 2017 年までには案を作成する予定である。欧州理事会 (European Council)、欧州議会 (European Parliament) 及び欧州委員会 (European Commission) の三者が協議するが、まだエラスムス・プラスが始まったばかりでもあるので、今後長い時間をかけてワーキンググループ等での協議も含めて話し合っていくことになるだろう。

## 4.6 ドイツ大学長会議 (HRK)

ドイツ大学長会議 (HRK) は、ドイツ国内の国立大学と国の認定を受けた大学の協議機関であり、大学の代表として、政府への意見や提案を行う機関となっている<sup>29</sup>。なお、2015 年 6 月に日本のパートナー機関である国立大学協会 (JANU)、公立大学協会 (JAPU) 及び日本私立大学

<sup>28</sup> DAAD : [http://ec.europa.eu/education/library/study/2014/erasmus-impact\\_en.pdf](http://ec.europa.eu/education/library/study/2014/erasmus-impact_en.pdf) (2016 年 2 月 9 日アクセス)

<sup>29</sup> 「【海外センターレポート・ドイツ】ドイツの高等教育機関」より抜粋 :

[http://www-overseas-news.jsps.go.jp/wp/wp-content/uploads/2015/06/2014countryreport\\_03bon.pdf](http://www-overseas-news.jsps.go.jp/wp/wp-content/uploads/2015/06/2014countryreport_03bon.pdf) (2016 年 2 月 9 日アクセス)

団体連合会（FJPCUA）と大学間協力のための協定調印を行ったところである<sup>30</sup>。

HRK は直接エラスムスによって学生等を派遣するわけではないが、政策的な観点からドイツの大学にとってエラスムスがどのようなものになっているか等の意見をうかがうため、担当者である教育部部長 Christian Tauch 氏にインタビューを行った。その内容は以下のとおりである。

#### 4.6.1 インタビュー内容

##### ① HRK はエラスムスにどのように関わっているのか。

ドイツにおけるエラスムスの National Agency の一つである DAAD と共催で、2014 年にセミナーを開催した。そのほかには、大学長会議として政策や予算に関することについて意見を述べることもある。

##### ② 以前のエラスムスに比べ、エラスムス・プラスはどのように変わったのか。

“Student and Staff Mobility in Times of Crisis 2008-2013”の中で述べられているように、海外留学する学生は、2008/2009 から 2012/2013 にかけて 6%の増加だったのに対して、インターンシップのために海外に行く学生は同時期比 16%の増加となっており、海外でのインターンシップを希望する傾向は、今後も続くものと考えられる。それは、EU 全体における労働市場で職を得るために、海外でのインターンシップ経験がある学生の方が採用される確率が高いからである。そこで、エラスムス・プラスでは、インターンシップへの助成も含む制度となった。

また、制度として大きく異なるのは、以前は LLP に含まれるプログラムのうちの高等教育の部分がエラスムスであったが、エラスムス・プラスでは、逆に LLP に含まれていた他のプログラムをエラスムスに含めたことである。政策的な観点から、LLP を広く EU 内に浸透させたかったが、エラスムス以外のプログラムはあまり認知されなかったという実情があり、広く知られるようになっていたエラスムスに内包することで、学生だけでなく広く一般の人にも利用してもらおうという目的がある。

構造的にもエラスムス・プラス以前は、高等教育支援、初中等教育支援、職業訓練支援、社会人のための教育支援等の縦方向の支援体制であったのが、エラスムス・プラスでは、人の流動性への支援、組織間のパートナーシップ支援、政策支援という横方向の支援体制となった。当初この構造が EC によって発表された際に、人の流動性への支援に関して、参加する初中等教育機関から高等教育機関のすべての段階における教育機関によって、例えば大学と小学校で予算獲得の競争が行われる状況となってしまうと危惧されたが、EC は、初等教育支援への予算額、高等教育支援への予算額は区別して決定するためそのような状況にはならないと主張し、エラスムス・プラスが開始された。

##### ③ エラスムスはドイツの大学にとってどのようなものか。

政府が 2020 年までに学生の 50%が卒業までに海外留学等の経験をするように目標を立てたが、

---

<sup>30</sup> HRK :

<http://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/agreement-signed-on-german-japanese-cooperation-3773/>  
(2016 年 1 月 24 日アクセス)

エラスムスによってそれも可能となるのではないか。また、(ドイツの学生を派遣するだけでなくエラスムスによって)ドイツの大学に留学してくる学生数も増えている。学生の流動性を進めるためには、必要不可欠な政策であると考えている。

また、エラスムスによって、学生をサポートするために EU 内の大学同士の結びつきも強化されており、大学にとっても重要なプログラムとなっている。

④ このようにエラスムスが長く続く秘訣は何か。

30 か国以上で進めているエラスムスであるが、当初は反対もあり、今よりは少ない参加国で始まった。いろいろと試行錯誤を重ねながら進めていくことで、参加国も増え、EU 内で合意を得ることもできるようになった。また、2020 年に現在のエラスムス・プラスが終わった後の後継事業について、すでに EC での議論が進んでいる。多くの国が参加するエラスムスのようなプログラムは、何年もかけて準備することもポイントだと考える。

⑤ 日本が同じようなプログラムを他の国と始めるなら、何が成功の秘訣となるか。

エラスムス・プラスは初中等教育や社会人等の支援も含むような制度であり、ここから始めるには規模が大きすぎるので、まずは高等教育領域で他の国と協力体制を築くことから始めるのがよい。また、他国の高等教育の違いも考慮に入れなくてははいけないし、それらを取りまとめる機関も必要となる。

## 5. まとめ

今回エラスムスというテーマに絞って、ヨーロッパ全体の支援体制やプログラムの推移、エラスムスによって海外に渡航するドイツの学生数や助成金額等の統計データや大学担当者のインタビューから、本プログラムが特にドイツの大学にとって、どのような意味を持っているのか等を中心に調査してきた。

学生にとってのエラスムスは、相互の単位認定に不安を持つことなく、休学する必要もなく、派遣元・派遣先の大学からのサポートを受けることができ、海外での留学やインターンシップを経験できるプログラムとして、よく知られた一つのブランドとなっている、ということであった。また、インターンシップのために海外に行く学生数が増加していることや、海外経験を積むことで就職に有利になるという一面も備えていることは、近年の傾向であるだろう。

ドイツの大学にとってのエラスムスは、学生の流動性を促進するプログラムであり、大学間の国際化強化にも役立っている。これは、学生派遣のための大学独自でのプログラムが少ないこと、海外留学する学生の半数以上、多いところでは 7 割強がエラスムスを利用している現状からも考察できる。また、大学間協定の半数以上がエラスムスの交流を基にしていることから明らかである。

エラスムスは 1987 年から始まったプログラムであり、年月をかけて徐々に制度もより良いものとなったものであるが、根底には「ヨーロッパ市民である」というアイデンティティを若いうちから教育しようという共通の理念があることが分かった。それは、高等教育を受ける学生だけ

でなく、それ以外のもっと早い段階での初中等教育や職業訓練、ボランティアを含む多くの EU 市民がエラスムス・プラスによって海外を経験できることから言えるだろう。そしてまた、人々の流動性を持続するため、エラスムスという概念そのものに終わりはなく、名前や支援内容を変えながらも今後もプログラムは続いていく、という姿勢からも、一過性の流動性を高めるプログラムとしてではなく、EU 市民のための教育プログラムとして継続的に行うべきものという共通理解の上で進められている。また、今回の報告書では取り扱わなかったが、これに加えて単位互換を容易にした 1999 年のボローニャ宣言もこのプログラムを成功へと後押しした一因だと考えられる。

調査前には、EU の地理的な有利さや英語の通じやすさ等によってエラスムスが進められているのだろうと考えていたが、共通の「ヨーロッパ市民である」というアイデンティティを人々が持っている状態を達成すべく、EU 全体で一致協力しているという構図が見えてきた。

このプログラムを日本で同じように、他のアジアの国と協力しようとした場合、共通のアイデンティティを「アジア人である」とするのはなかなか難しいことであり、単位互換や大学の制度の違い等の問題は残るところであるが、まずは少数であっても国単位で学生や教職員の流動性を高めるためのプログラムを開始し、学生が単位や卒業等に不安のないようなサポート体制を構築していくことで、日本の学生や教職員の流動性を高めることができるようになり、限定的ではあるがアジア地域での協力体制が強化されていくのではないだろうか。異文化の中で、多様な考えやコミュニケーション力を経験した学生が増え、それによってもたらされる効果は計り知れない。また、一時的に流動性を高めるだけのプログラムではなく、今後さらに求められるであろう国際化に対応できる人材育成という観点からも、支援期間の定めなく、サポートできるプログラムを構築することが望ましいと考える。

結論としてはスケールの大きな話となってしまったが、本報告書のテーマとしてエラスムスを調べていく中で、大学職員として、学生が海外で留学やインターンシップを行うためのよりよい支援を今後も模索していきたいと感じた。

## 謝辞

本報告書作成にあたり、インタビューやアンケートに快くご協力いただきました関係各機関の皆様、ご指導・ご助言いただきましたセンター長及び副センター長に御礼申し上げます。また、この度の国際学術交流研修の機会を与えてくださった、日本学術振興会、広島大学、そして慣れない海外生活の中で、日常生活に至るまで支援してくださったボン研究連絡センターの皆様から感謝申し上げます。

## 参考文献

- ・ European Commission, Erasmus+ Programme Guide, 2015
- ・ Statistisches Bundesamt, Deutsche Studierende im Ausland Statistischer Überblick 2002-2012, 2014
- ・ DAAD, Student and Staff Mobility in Times of Crisis 2008-2013, 2014
- ・ European Commission, The ERASMUS Impact Study, 2014
- ・ H.パイザード／G.フラムハイン著、「ドイツの高等教育システム」、玉川大学出版部、1997年
- ・ 浜本隆志・高橋憲著、「現代ドイツを知るための 55 章 変わるドイツ・変わらぬドイツ」、明石書店、2002年
- ・ 北原和夫著、「ヨーロッパにおける教育の実験－「エラスムス」計画－」、日本物理学会誌 Vol.55, No.8、2000年
- ・ 牧かずみ著、「国際教育研究交流の促進へ向けて：欧州の高等教育機関の取り組みから何が学べるか」、信州医誌 57(3) 101-109、2009年

## 主なウェブサイト（各項目については脚注参照）

- ・ 文部科学省（MEXT） <http://www.mext.go.jp/>
- ・ 日本学術振興会（JSPS） <https://www.jsps.go.jp/index.html>
- ・ ドイツ連邦教育研究省（BMBF） <https://www.bmbf.de/>
- ・ ドイツ学術交流協会（DAAD） <https://www.daad.de/de/>
- ・ ドイツ大学長会議（HRK） <http://www.hrk.de/home/>
- ・ ドイツ統計局 <https://www.destatis.de/DE/Startseite.html>
- ・ 欧州委員会 European Commission ERASMUS+ [http://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/index\\_en.htm](http://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/index_en.htm)
- ・ Lifelong Learning Program - European statistics <http://de.statisticsforall.eu/index.php>
- ・ ボン大学 <https://www.uni-bonn.de/>
- ・ ケルン大学 <http://www.uni-koeln.de/>
- ・ デュッセルドルフ大学 <http://www.uni-duesseldorf.de/home/startseite.html>
- ・ キール大学 <http://www.uni-kiel.de/>